

高 群 逸 校

— わが恋の記 —

一

わたしは恋のお話をしたい……。

わたし達の思想は、あらゆる出来事のなかに、満ちていなければならぬ。で、わたしは、およそ革命などのお話とは、似ても似つかぬと思われている、恋のお話のなかに、わたしの拠つて立つ、アナーキーを見ようと思う。

二

わたしは貧しい百姓の家に生れた。物心ついた時分、もはやわたしの家は、すべての財をなくし、あてどなき放浪の旅についていたのである。その旅は、わたしの父と、その若い恋女房との、道行きでもあつた。わたしの父は、もつて生れた才気と、苦学の結果のわずかな知識を、唯一の資本として、寺小屋の小学校の教員を勤めることとなつた。その時分は、教員になるにも、資格の有無などということとは、田舎ではほとんどなかつた。そこ

で、わたしの父は、彼の貧弱な学業で、事足りるような学校——つまり、田舎の学校を、田舎の学校をと、遠く求めて行ったのである。

父よ、わたしは今、これを書きながら、思わずあなたのために、泣けてしまふやうである。げに「人生れるや自由である。が、それとともに、無慈悲な鉄鎖は、幾條となく、早くも、そして常に彼を縛りつけてしまう」のである。

父は母との可憐な恋を、ただ一つの力として、住み馴れた故郷をあとに、雲白く山遙かな——だが、恥辱と貧困の旅路についた。

三

諸君、わたしのお話は、このようにロマンチックです。が、諸君はお気づきになるでしょう。ものごとは、それがロマンチックであればあるほど、実際は常にその反対であることをね。

ロマンチックついでに、わたしは一つの、ほのかな記憶をおもいうかべる。もつともこの記憶は、父も母も、否定していたので、もし彼等の否定を真実だとすれば、これはわたしの幼い日に見た、夢の一つであるかも知れない。

ある遠い日に、わたしは親達とともに、一つの大きな河の岸を、美しく旅していた。美しく？　しかり、美しく！

わたし達の泊るところは、柔らかな草の上や、荒れた小さな堂や、藪かげであつた。そ

二十一

れらはわたしをたいへん楽しくした。が、ただひとつの悲しみ、それはわたし達が、村を通ることである。村を通るとき、その多くの鼻つたれ小僧どもに出あふことこそは、何と当惑すべき出来事だつたらう。彼等はわたしをわらつた。わたしは思った。「なぜ彼等はわらうのだらう。わらつたつていいや。ただ困ることは親達に気の毒なことなんだ」と。

そこでわたしは毅然としてそれらの悪童に対すると共に、親達を慰めていった(?)のである。「彼等はみんな馬鹿だねえ。あたしは彼等の誰よりも偉い人になるでしょうよ。お母さん」

そうした旅のことを、わたしは夢のようにおぼえている気がする。いつたい何の旅だつたらう。しかし、その旅の中でわたしが経験したらしい——村の鼻つたれ小僧どもに対する——感情は、その後、幼い日の幾年の間、ずつと残つて、わたしを支配していた。わたしは親達に気の毒であるためにのみ、よそのブルジョアジーの子供よりはずつと立派な子供でありたいと思つた。わたしは親達を、そんなにも愛していたのだつた。

わたしは思う。屈辱多い放浪者の子は、人生の初めに、まず親に対して、火のような愛情をもつと。

四

わたしの次に弟達が生れた。生活は困難を加えた。父と母は、「子供のための貯金箱」というものを作つて、柱にかけていたが、そんなものもちろん長く続くわけはなかつた。

何の希望もなく生活の波に押し流されていく人々——父達がそうであった。この頃から、わたしの家には呑んだくれどもが、毎日のようにやってきた。その上、子としてあさましくも、悲しく感じられたことは、父の母に対する限りなき欲望の追求である。おお、そのため美しかった母は瘠せ衰えた。また彼女は、子供に対する気兼ねからも、われらの「呑んだくれおやじ」の暴力に烈しく抵抗し、そして大いそれが原因となって、踏まれたたかれた。

わたしは幼くしてすべてを知った。わたしは父や母を、むしろ二人にすることが、かえって無事であることを呑み込んだ。わたしは弟妹達の手をひいて、遠く戸外に出た。わたしはその頃から、すでに自由ということの、何であるかをも知ったのである。見よ、わたしの前に高くそびえ立つ山——わたしは溜息をついて懐れのまなざしをあげた。「ああ自由な、平和な、高い高い山——かくてわたしは、わたしの背後に蔽蕪な醜さの展開していることを考えながら、前方遠く、高く、自由と平和を望み見た。

呑んだくれどもの訪問、やつらの喧嘩、貧乏、病氣——こうした空気の中に、わたしはそれでも、比較的健全に育った。わたしを健全にしたのは、自由へのわたしの限りなき憧憬、わが悲しき父と母に対する切な愛と、つらい思いやり、「この世から一切の不仕合わせと醜くさをなくしたい」という希望の芽生え、知識に対する燃ゆるような渴望等のためであった。

二十一内

五

わたしは恋のお話をすると言っておきながら、すでに多くのページをなくした。わたしはどうして、それらのすべてのお話は、出来ないだろうと思う。しかもわたしは思う。いったいわたしに恋があつたらうか？

わたしは恋をすべく、あまりに別な世界にいたようだ。わたしは親達の絶望的な生活や弟達の可憐ないじけた姿を前にして、泣きの涙の日を送った。また、それと共に、限りなき知識欲が、わたしの心の大部分を占めていた。

わたしはお話することを、少し恥かしいように思う。なぜなら、いまもお、わたしはわたしを「思う」といった人々の言葉を、決して信じていないからである。わたしが「思われ」るなんて……。

ところが、そうしたことは、かなり多かつたのである。よく考えてみると、彼等はわたしの「おとなしい」のが気に入らしたのである。

わたしはおとなしかった。「育ち」のよい(?)子であった。よその子と遊ぶにも控え目に遊んだ。

わたしは多くの美しい、快活な女の子達を知っていた。そしてそれらは、わたしにとつて、全く別種の人であると思われた。わたしはそれほど惨めな様子の子であった。

一人の男の子がいた。わたしを見ると、棒きれで打ったり、抓ったりした。わたしはひそかに思っていた。「どうして彼はわたしをいじめるのだろう」

そのうちわたしも彼も少し大きくなった。すると、彼は自分の弟をひきずつてきて、わたしにぶついたりするのである。そして「天神さま」の堂の壁に、わたしとその弟とが「いい仲」だという落書をするのである。わたしは大へんめいわくに思つて彼を憎んだ。彼の仕打ちには、恋態的のものであつたらしい。

二人とも十三か四になつた時分は、彼はわたしに、大へん親切であつた。酒乱の父が母をぶんなぐるうとして追つかけたりする。近所の子供達は、面白がつて見物する。そんな時、彼は近所の人達とともに子供達を追つぱらつたり、母を逃がしたり、父を寝かしたりしてくれた。さわぎが静まつて弟たちも寝てしまふ頃まで、彼はわたしの家の石段のそばに立つて、わたしのことを心配してくれていた。

ある晩、わたしは悲しくて、泣けて仕方がなかつた。わたしは垣根にもたれて、ほんやり考えていた。すると彼が寄つてきて、「泣くなね」といった。そしていったのである。

「いいかい、大きくなつたら二人で仲よくしようや」

求愛の言葉である。

わたしは素直にうなずいていった。「ええ」

この二人の少年少女の愛は、わたしの裏切りから未発達に終つた。裏切り——つまり、わたしは恐れたのである。というより、わたしはもつと、何だか大きな、そして切な望みを抱いていたかのであつた。大きな望み——それは例えば、自由な、無碍な、大胆な生活への、本能的なあこがれである。二人がおない年の十八になつたとき、彼の求愛に対

して、わたしは冷やかな言葉を投げかけた。「あんたがさ、あたいを思つてるなんて、……あたいのどこがいい？」そして笑いこらげて、逃げてきてしまつた。この頃から、わたしは少し、後年恋愛詩の作者たる天分を發揮していたのである。

六

十五の時、縁談がもち上がった。四つ年上の男が、わたしをほしいというのであつた。さて、ここで、わたしはわたしのいやな性質を、お話ししなければならぬだろう。わたしは「おとなし」かつた。けれど……つまり、わたしはごく瞬間であれば、やすやすと男をひきつけることのできる（！）方法を会得していたかのである。

ある霧の濃い朝、わたしが川ばたで洗濯していると、そのむこう岸へ、一人の若者が下りてきた。彼はしゃがんで何かしていたが、霧が二人を包んでいたものだから、彼は大胆になつて、わたしに「お早よう」と、よびかけた。そして、小石を擲んで投げて、わたしの肩へあてた。わたしはいつた。「ずいぶんねえ。いいさ。惚れてあげないから」

しかし次に道で二人があつた時、わたしは赤くなつて、非常に内気になつて、お辞儀をしたのである。この若者がわたしをほしいと言いだしたのである。仲人をたてて。

わたしはそれらの人々をなつかしいと思う。けれどそれらの人々は、たしかにかん違いをしていたのである。女というものは、それがどんなに魅力のない女であるにしても、瞬間、男をひきつけることは、いと容易である。老カラマゾフがいつている。「足のかかと

みたいな女にでも、俺一寸の間ぐらいは惚れることがあるね」

わたしの恋は、その後も、殆んどみんな、そんなふうのものであつた。そうであればあるほど、何だか「遊戯的」(私にとつて)であつた。それはわたしを不愉快にしたが、同時にわたしをそうした恋から、直ちに逃げさせた。わたしは冗談にも、わたしを「思う」という人々のすべてに対する時、常に直ちにわたし自身の無価値を反省し、またそれと共に、わたし自身の「自由」が、殆んど絶対的にまで、わたしを支配していることを思い浮かべずにはいられない。

彼等はよくわたしに「結婚」の話をもちだした。彼等は面白く思つてか、それともまじめにか、とにかくわたしを縛りつけることを好んだ。だが、わたしにとつて結婚は、善き恋のたわむれの一つとしてか、相互の愛情にほだされた場合かをほかにしては、本気には考えられなかつたのである。

わたしは羽衣伝説に、たいへん興味をもつている。あの伝説は、世の男たちが女をだまして結婚——つまり家庭に閉じこめるために、いかに苦心したかということ物語るものではなからうか、とにかく、男たちはたいへん結婚を好むようである。少くともわたしの場合は、そうであるようだつた。

七

いつの頃からか、わたしは次のようなことを思うようになった。「わたしは恋される資

二十二内

格なく、恋する資格がない」

わたしは恋のために、わたしの全身心をささげて生きるということが出来ない。もつとも他の生活に対しても。社会といったようなものに対しても。

社会のために、全身心をささげるといふようなことも、わたしにとつては全く不可能なことである。わたしがかりに革命のためにたおれるとする。すると私は、最後の息を引きとる時、きつとある不満を感じるであらう。

これはどうしたことだろうか。わたしは思う。たぶんわたしは、あらゆる生活の全部を、平等に生かしていききたいのだろうと。わたしは、生活が「犠牲」を必要としない社会を、全本能によつて、希望しつづけているのだろう。さりとてわたしが恋に對し、また他のすべてに對して、真剣でないといふことがいえようか。否、いえない。が、わたしの「自由」は、それが「自由」であるだけに、常に複雑な形をとる。わたしはある時において「水のような」人、他の時において「火のような」女性であらう。

遠い昔、春、わたしの歌。

「椿の花、拾いて仰ぐ、ひとひらの、

白雲飛ぶや、飛ぶや、いづくまで」

その白雲のように、わたしは明るくてさびしい。